

DJ少女達は可愛い

ぽぽろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕の周りにはDJをやっている子が沢山いる。

皆、ちよっぴりおかしい所もあるけれど可愛くて、そんな日常を描く物語

目次

水島茉莉花は人をダメにする可愛い	1
清水絵空は積極的かわいい	6
桜田美夢は小悪魔可愛い	11
花巻乙和は子供っぽい可愛い	17
笹子・ジエニファー・由香は時々乙女可愛い	25

水島茉莉花は人をダメにする可愛い

朝は戦争である。

朝は時間と戦い、眠気と戦う。”春眠暁を覚えず”と言う諺がある通りに春特有の心地よい風や暖かい陽気は眠るのにもピッタリだ。

そして朝は時間が無い、登校時間ギリギリまで眠り、飛び出すように家を出ていく。

この様に普通は時間や眠気と戦うものだが、僕は違う。僕の敵は人だ

「ほおら、秋くんもう時間だよ〜ご飯できてるよ〜」

間延びした甘い声で僕の名を誰かが呼んでいる。

今日は平日で、僕は学校に行かないといけないのだが人間の三大欲求の一つの睡眠欲には勝てない。

声のお陰で多少意識は浮上したがまた水底の奥深くへと沈む

「ん…………あと5分…………」

「もうしようが無いな〜」

天使の眠りへの誘いに誘われて僕はまた眠気に身を委ね……………ん……………?

ここである異変に気がついた。

僕はお金持ちの友達のツテで家を安く借りて一人暮らしをしている。

でも、今僕以外の声がしていた。

身体を勢いよく起こして声の主を探そうとする。

「わあーびつくりした〜」

謎の声は僕の隣にいるらしい。

寝ぼけ眼を擦りながら横を見るとそこには、エプロン姿の水島茉莉花さんがいた。

こちらが向いたのに気づくとニコリと優しい笑みを浮かべる。

「茉莉花さん!？」

「うん、茉莉花だよ〜」

「あの…………茉莉花さんなんでここにいますのしょうか」

鍵はちゃんとしつかり掛けて寝ていたはずだ。セキリユティも清水グループの安心安全の防犯のほずで、その一人娘以外きつと開けられる人なんていないはず……

「前に家に入らせてもらった時に合鍵作ったんだよね〜ほら、可愛いでしょ?」

ぷらりと指からぶら下げられたものを見てみると確かにそれは僕の家の鍵の形と酷似していて色々なキーホルダーが付いていていかにも女の子らしい。いや、そうじゃなくて

「何勝手に作ってるんですか!?!」

前からよく家に来てご飯とか掃除をしてくれていたけれど、遂にはしてはいけない所まで行ってしまった様である。

「秋くんの事は茉莉花が何でもしてあげたいからだよ〜!」

「……」

一体僕はどうすればいいのだろう。

このまま茉莉花さんに身を委ねてもいいかもしれない、だってこんなに女の子らしくて面倒みも良くて家庭的でスタイルもいい。こんな人と一緒に居れたら幸せに絶対になる。いやでもそしたらダメ人間一直線だ。

取り敢えず目の前のご飯を食べて考えようか。

いただきます。と手を合わせて箸を手に取りご飯を口に入れ……ようとした。

まさに口に入れようとした時に茉莉花さんに箸を取られた。

「はい、あーん」

「いや、自分で食べれますって……」

「はい、あーん」

茉莉花さんはいつもM e r m 4 i dの練習とかでDJの鳴らす爆音の音楽を近くで聞いているから耳が難聴になってしまった。だつてさつきから僕の話聞いてないもん

諦めて差し出されているご飯を食べるとふっくらと炊けていて、噛むと鼻から香ばしい香りが突き抜ける。

味噌汁も無理やり気味に飲むと味噌や出汁の風味がたまらない。

全てあーんで朝食を食べるといふ稀有な体験をした後に水でも飲むと席を立つ。

すると尋常ならざる力で僕の肩を茉莉花さんが押さえつける。えっ？力強すぎない？

肩がミシミシ言うくらい強い、ダリヤさんに引けを取らないくらい。

「どうしたの〜？」

「いえ、水でも飲むうかと」

「やってあげるね〜」

すると茉莉花さんは棚からコップを出し水を入れ僕の前に置いた。

そのコップに伸ばした手を普段おっとりしている茉莉花さんに似つかないスピードで手刀で取り払われた。

そして、コップを茉莉花さんが持ち、それを飲ませられる。

まるで介護されている気分

「いや、僕赤ちゃんじゃないんで自分で出来るんですけど……」

「いいの、茉莉花が何でもしてあげるから。秋くんはずっとここにいてくれればいいからね」

助けてさおりさん。あなたのDJ仲間がおかしくなってしまうました。

いつも練習の時こんな大変な思いをしてたんですね、今度一緒に苦労でも語り合いましよう

「あー今別の女の子の事考えてた！今は茉莉花のことだけ考えてくれればいいの」

サラッと心の中を読まれた。そんなにわかりやすいかなあ？

「そういうのは彼氏にしてあげてください」

「いないもん」

「茉莉花さんは可愛いので直ぐにできますよ」

「可愛い？茉莉花が？ありがとー！大好き！」

顔を一瞬りんごの様に真っ赤に染めたかと思いきやロケットのように凄い勢いで僕に抱きついてくる。

理性がゴリゴリと削られていくのが分かる。

あー茉莉花さん、甘酸っぱいい匂いする、そしてムニムニと形を
変える柔らかいものが〜!

モデルとやっているという茉莉花さんのスラリと細く伸びた脚や
腕、細身の身体。しかし出る所は出ているという身体に抱きつかれる
というのは中々僕には刺激が強い

「茉莉花ね、好きな人いるんだ」

「なら僕なんかに構ってないでその人にしてあげてください、誰です
かその人は」

別に言われてもわかんないだろうけど。

でも茉莉花さんの好きな人か：世話好きな茉莉花さんの事だから
母性本能をくすぐるような可愛い男性だろうか。等と考えてい
ると急に頬に柔らかい感触があった。

驚いて彼女の方へ見ると何とも蠱惑的な笑みを浮かべていた。

きっと僕はキスをされたのだろうか。

「今のでわかった?」

「いやあ、分かりません」

「頬にキスしたんだけどな」

「え?その人に今みたいにキスまでしたんですか!」

「む〜!勇気出したのに!!」

どんどんと悔しそうに机を叩く茉莉花さん。何とも子供っぽくて
可愛い。

§何かその人とあったんですか……

§

§あの後腕を組みながら学校へ行くというとても恥ずかしい経験を
した後にクラスメイトの犬寄しのぶに先程までの事を話した。

「何で私に言うんだよ。わざとなのか?」

「え、茉莉花さんの好きな人って誰だろうと思って」

「はっ」

待って睨まないで怖いから

「でも驚きだよね、まさか好きな人いるなんてさ」

「私はまあ、知ってたけど」

「嘘!？」

「いや、わかり易すぎる程だっただろうが」

「どんな人なんだろうな……」

「そういえばキスされたところってどこだ」

「え、ああ、ここかな」

ちよんちよんと指で場所を示すときのぶは鞆からウエットティッシュを取り出した。

一枚出すと僕の頬を削り取るように力強く何度も何度も拭いた

「痛い痛い」

「リップとかついてたら大変だろうが」

その後ウエットティッシュが二、三枚乾いてしまふ迄拭かれた。

いや、拭きすぎじゃない? そんな取れないものなのかな。僕の頬は取れそうになっただけだね。

清水絵空は積極的かわいい

暖かい春の陽気に包まれ鳥も囀り、花も心做しか喜んでいるかの様なそんな気持ちのいい朝。

「知らない天井だ……」

僕は謎の場所で起きた。

上から下がるシャンデリアや周りにある民族的なものや骨董品、他にも高価そうな物が並んでる部屋。

「すう……すう……」

ここは……見たことあるような…無いような。

「すう……すう……」

さつきからやけに首筋辺りに生暖かい人の息見たいものが掛かるんだが、何故だろう。

「わあああああ??」

過去一びつくりした。死ぬほどびつくりした。

僕が反対側に顔を向けたら清水絵空がいたのだ。

太陽に照らされて彼女自慢の深緑色の髪の毛は輝いていて、それこそ自然の様な丸ごと包み込む温かさを感じる。

鼻は小ぶりで唇は鮮やかなピンク色、顔も整っていていつも二つに結っている髪の毛は下ろされていて大人っぽさというか色気のような物を感じさせる。

ってこんなに観察してる場合ではなくて

「何故僕は絵空ちゃんの家で……?」

昨日は確かしのぶと夜遅くまでゲームをしてその後寝たはず。ちゃんと鍵をかけて。

まあ、朝起きたら人がいるのは、まあいい。

いや、良くないけど。

でも幾ら絵空ちゃんや僕といえど高校生の男女、こうやって同じ布団に入って寝ているのは宜しくないだろう。

春奈ちゃんにバレたら『破廉恥です!』って怒られそうだね。

起きようにも動こうにも僕の服を絵空ちゃんが掴んで離さないため身動きひとつ取りにくい。

もし、この現場を清水家の使用人に見られたとしたら………ぶるつと背筋が凍る。ドアの方へ顔を向けるとまだ閉まっているのでセーフ。

まだ僕は生きてられる。よし、まだ世界は味方。

「絵空ちゃん、起きてー、早くしてくれないと僕、清水家が敵に回っちゃうから」

「んっ……ん……」

目の前のお姫様はまだ目を覚まさない。

そんな時に王子様のキスで目が覚めればいいのだけど、リターンに對してリスクが大き過ぎる。そんな事したら世界という名の清水家が敵に回ってしまう。絵空ちゃんも絵空ちゃんのお父さんも怒って今の家を追い出される羽目になる

あれ？今僕って中々に危険なのでは？

地雷原でタツプダンスをしているみたいだ。

そう言えば、一人暮らしでアパート借りる時に近くの不動産屋に行ったら周りが清水家傘下のアパートばかりだったんだよね。

しかもそれはココ最近のことだそうなの。

麗ちゃんに他に無いかと聞いてみたら、『すみません、うちは不動産屋はやっていないので……私の家のお部屋ならタダで貸出できますよ！』

と満面の笑みで言われた。麗ちゃんなんと非道な薄情な。

「ふぁ……秋、おはよう。今日もラブリーな一日にしましょう？」

「うん、突然で悪いんだけどさこの状況説明してくれない？」

そんなこんなでどうでもいい事を考えていると、やっとこさ起きたお姫様。

起きると同時に僕をぎゅつと抱きしめる。

僕と彼女を隔てるものは薄い彼女のパジャマと僕の服。それもあまり厚いとは言えず身体の柔らかい感触がダイレクトに伝わってくる。

る。そしてふわりと香る甘い匂い

「あの……絵空ちゃん？」

「昨日の夜はとつてもラブリーで熱い夜だったわねえ〜♪」

「本当に辞めてまじ辞めて、今そこに使用人さんがドアに手を掛けてるから、僕、射殺されちゃうから」

「誰も貴方を殺しはしないわよ、というか私がさせるわけないじゃない」

「いい」

男らしい……惚れそう

「それでなんで僕はここに？」

「えっと……それは……その……」

いつもならこちらを揶揄いながら答えるはずの絵空ちゃんだけど、今は少し頬を赤く染めて口ごもっている。僕はそれに対して首を傾げながら答えを待つ。

「き、昨日ホラー映画？ってものを見たのよ」

「ホラー映画、成程それで？」

「とても面白かったのだけど見た後寝るのが怖くなっちゃって……」

「大人っぽい絵空ちゃんでもそんな可愛い所あるんだね！」

確かによく見てみると目は少し腫れぼったく、赤くなっていて涙を流した後の様なものが分かった。

「可愛い……？」

「うん、絵空ちゃんって大人っぽいイメージがあるけど、夜寝れなくなるなんて子供っぽくて可愛いなって」

「ふふっ、ありがとダーリン♡」

「それはやめて、みんなに殺される」

「愛してるわ、ダーリン♡」

「あばばばば」

絵空ちゃんのイタズラ心に火がついたのか、いつもの甘い蠱惑的な声を耳元で囁く。

「私だって、好きでもない人にこんな事言わないわよ？」

ふむ、という事は僕と絵空ちゃんは友達を超えて親友ということだ

ろうか。

信頼されているという事、そんな事を言われて嬉しくないわけが無い

「つて……あれ？なんてそんなに項垂れてるの？」

「いいえ、なんでもないので、そうよね、これで気づいていたらもうとつくに私のモノにやっているはずだし……もつとアプローチをするべきなのかしら……」

途中からボソボソと言われても僕には聞こえないし知らない。でもバカにされているような気もする。

「ねえ？これからも私と一緒に寝てくれる？」

「ベツトが別れててちゃんと事前に言ってくれたらいいよ」

「ええ〜いいじゃない〜♪ただ寝るだけよ？」

「僕達高校生、そして男と女、分かる？」

「でも私のパパとママは一緒に布団で寝てるわよ？」

「僕達は絵空ちゃんのパパとママじゃないからね」

みんな友達にしては距離とかが近すぎやしないだろうか。そして、世話を焼きすぎでは無いだろうか。確かに外で手を繋いで歩いてたり抱きしめあつてる女の子2人組を見るけれど、それを男にするのはもつと親密な間柄、例えば恋人などとするべきだろう。そして、確かに僕は生活は壊滅的かもしれない。でもそれはきつと茉莉花さん等のせいもあつて……

よし、今度衣舞紀さんかダリアさんあたりに自立するためにレクチャーしてもらおう。

ダリアさんと茉莉花さんが知って『お世話が出来ない』と泣くだろうから、衣舞紀さんがいいだろうか。

「こんなに貴方の周りの子が積極的なのは貴方に選んで欲しいことがあるからなのよ？」

「僕が選ぶこと……」

「出来れば私を選んで欲しいのよねえ〜♪」

え？何僕の進路？皆心配するほど僕の進路って危なかつたりする？テストは毎回色々な人に教えて貰ってるから大丈夫なはずなんだ

けどなあ。でも絵空ちゃんを選ぶとか言ってたし……流し目でそんな風に見られても分からないよ。

そんな事を考えていると絵空ちゃんがはあ、とため息をついた。

「何か間違ってた？」

「ん〜全部かしら」

「そっかあ」

「ペナルティとして今日は一日私が貴方にくっついて学校で生活してもらいまあす♪」

「え、ペナルティなんて聞いてない」

あの後本当に僕の腕を絵空ちゃんが離してくれる事はなかった。

皆からすごい目で睨まれて僕はその日を過ごすことになった。

いつも無表情の咲姫ちゃんが今まで見たことないくらいにすごい顔で睨まれた。

そんな中で絵空ちゃんが『ダーリン♡』なんて言うものだからみんなに怒られる羽目になってしまった。

何故僕が怒られないといけないのだろう。

世界はなんて不平等だ。

桜田美夢は小悪魔可愛い

ここは有栖川高等学院。

僕の通う陽葉学園とは違う訳なのだが、何故ここにいるのかというと、この学校のDJユニットのメンバーの一人、桜田美夢ちゃんに呼ばれたからで。

何回来ても、周りの人が皆上品で周りの建物や雰囲気すら高級で何とも場違い感がある。

『御機嫌よう』と挨拶されても未だに少しテンパってしまう。

癒し枠として麗ちゃんでも連れてくれば良かっただろうか。同じ女の子でお金持ちを連れていることだから少しは僕の場違い感も薄れるだろうか

最早顔パスで通れるようになってしまったことに複雑な気持ちを抱えながら門を潜り、彼女達のいる教室へ向かった。

「胡桃さんにみいこさん！今日こそは許しませんからね!!!」

「昨日もそんなこと言ってたの……」

「うるさいです！なんであなた方はいつもいつも……」

教室の扉を開けると、最早いつもの光景となった春奈ちゃんが胡桃ちゃんとみいこちゃんを叱っている。

「あ、こんにちは美夢ちゃん」

「あーご機嫌よう、秋くん」

近くでにこやかにその光景を眺めて居た美夢ちゃんに挨拶をすると、美夢ちゃんは制服のスカートの端を掴み、軽く持ち上げ、カーテシーというらしいがそのまま僕にお辞儀をしながら答えた。所作の一つ一つが洗練されていて何とも美しい。

「今日はあの二人何やったの？」

「えっと、教室の扉の上に黒板消しを挟んで春奈ちゃんが扉を開いたらそれが落ちて粉まみれに……」

確かに顔を真っ赤にして怒っている春奈ちゃんの頭を見ると僅かに白いチヨークの粉らしきものが残っているのが見えた。

「随分と古典的なイタズラだ……」

「あはは……」

二人で苦笑いを浮かべながら三人を見つめた。

「そう言えば、何で僕を今日呼んだの？」

「ああ！そうです！こつち来てください」

「いや、あの三人は……？」

「放っておく？」

「そうだね」

そのまま何処かの教室へ連れてかれる。

「ここに座ってもらっていい？」

「うん、分かった」

ちようどその教室であつた椅子に座る。

一体僕に用事……

でもDJとか曲の事なんて僕知らないし……

今すぐしのぶか響子ちゃん辺りに助けを呼ぶしか。

「あの……えつと……」

頬を赤らめながら口ごもる美夢ちゃん。

何をそんなに躊躇うのだろうか。

ふうくと息をゆつくり吐くと覚悟を決めた様に僕を見据えた。

「秋くんを、ゆーわくします！」

「……………ん？」

僕の耳はPeakyな人達だったりPhotonの人達の練習に連れてかれて間近で爆音の音楽を聞く事で耳がお釈迦になつてしまったのだろうか。

「ごめん、もう一回いいかな」

「秋くんをゆーわくします！」

僕の耳は正常だつたらしい。ありがとう渡月家印の耳栓。練習に連れていかれた時にお世話になつているよ。あとりんくちゃんに絡まれた時

「なんでそんなことを……」

DJユニットとして更にパワーアップをする為という事なら僕は

全く知らないし力になれない。

だから僕は有益な情報を持っていない。

持っているとしたら、清水家と渡月家の色々な……

朝起きた時に清水家、渡月家の婚姻届が判子押すだけの状態で二つ置かれてた時は驚いたね。

「あんまり私達と秋くんって会えないではないですか？」

「学校も違うし、ここお嬢様学校だし……」

そんなここに気軽に入れるものでもないし。僕は何故かもう顔パスで入れるけどあんまり好んでは行きたくない。場違い感がすごいもん。会社の中にスーツ着せたゴリラが居るくらいの場違い感

「でも大学の方には結構行ってるよね？」

「いやあ……あれは行ってるって言うか、連れてかれるっていうか、行く事を脅迫して強要されているって言うかいつの間にかいるっていうか……っていうかなんで知ってるの？そんな事」

返答の代わりと言わんばかりに、にっこりと美夢ちゃんは微笑んだ。

うーん、これはこれ以上詮索すんなって言う笑い方ですね。

よく使う人がいるから知ってるよ。怖いなあ……

もしかして何かの暇つぶしとして僕は見られている!?

「同じ学校の人は沢山秋くんと会えるのに私達だけあまり会えないから……」

「寂しかった、みたいなの？」

美夢ちゃんはこくりと頷き頷いた。

何故僕に会えないだけで寂しいのか知らないけど、何か悪いことをしちゃったな。



「まず、これ食べてくださいー!」

勢いよく両手に乗せて出されたものは、可愛いラッピングテープに包まれた美味しそうなチョコのクレープ。そして、さらに乗せられた別の皿にチーズケーキ。

「なにこれ？」

「今日授業中に作ったの、食べて?」

「なるほど、とつても美味しそう」

最初から誘惑とは掛け離れているけれど、やはりお嬢様と言うべきかそんな僕が思っているような低俗で下衆な事は知らないだろうけど。

「ふふ、紅茶入れるね」

自販機や教室の掃除用具感覚で各教室に置いてある紅茶セットで準備をしてくれている。

僕はクレープにかぶりついて、甘味を楽しんだ。

「紅茶入りましたよって、鼻にクリーム付いてますよ」

「え?うそ」

「私がつってあげます」

おしぼりを手にこちらにトコトコと歩いてくる。

もうすぐ目の前にまで来たら美夢ちゃんはおしぼりを机にポイツ

と投げ捨て僕の鼻をペロリと舐めた。

「?!?!」

衝撃的過ぎて言葉が上手く紡げない。

ここの教室、暖房が効き過ぎていないだろうか。何だかとっても顔が熱い。

それに対し美夢ちゃんは、妖艶で蠱惑的な笑みを浮かべている。

こんな表情の美夢ちゃんは今まで見たことがない

「誘惑するって私、言ったよね?」

いつの間にかいたのか耳元で囁き、最後にフウーと息を耳に吐いた。ぞわりと身体を駆け巡る快楽。

逃がさんとばかりに後ろから美夢ちゃんは僕に抱きついた。

すぐ後ろを振り向けばぶつかってしまいう程近い距離で。

「次は唇にキス……しちやいますよ?」

大人びた色香を纏った彼女に僕はもう抗うことが出来なくなっていた。

いつもは清楚でお淑やかな妹の様に思っていたはずが主導権も握られ彼女が何かをする度に何かが身体を駆け巡る。僕の事をニコリ

と含みのある笑みで見ながら頬に手を添わせて真正面に移動し僕を見据えた。

僕は諦めるように目をつぶった。

彼女から香る香水らしき柑橘系の甘酸っぱい匂いの他に女の子特有の甘い香りがより一層理性を奪い判断を鈍らせる。

近づいてくる事に少しずつ彼女の香りが強くなっている。

今日を開けたらきつと彼女の端正な顔が目の前にあるのだろうか

「美夢さん!!!」

そこでガラリと扉の開く音と共に響いた僕でも美夢ちゃんでもない声

「あ……春奈ちゃん……」

修羅の覇気に身を包んだ鬼と形容するのが正しい程の春奈ちゃんが立っていらつしやった。

「居なくなっただけかと思つて探していたら……お二人は何をされていたの?」

彼女は笑顔だ、笑顔はずなんだけどここまで怖い笑顔は今までなかった。

見ると幸せを感じるはずの笑顔の裏にドロドロと渦巻く黒いオーラのせいだろうか

「えつと……お茶会……かな?」

冷や汗を垂らしながら美夢ちゃんが答える。

「なるほど、恋人のような近さで尚且つキスをするようなのがお茶会ですか、そんなお茶会是非見てみたいですわね?」

ひい!超怒ってるよ、般若みたいな顔してるもん

「秋さんも甘すぎます!そんなだからつけ込まれるのですよ!」

「ひい!つけまこれる……?、あの……春奈ちゃん?怖いんだけど……」

威圧的なオーラについていっつい圧倒される。

「春奈ちゃんがそんなに怒っているのは、きつと自分も秋くんと一緒に居たかったからなの!」

「実は秋くんが来るまで春奈ちゃんがとってもソワソワしてたしね

」

扉から顔だけ出した胡桃ちゃんとみいこちゃんが教えてくれる

「そ、そんなことはありません!!!」

あれ? ちょっと怖くなくなった

「そうだよね…春奈ちゃんも秋くんと二人きりになりたかつたんだね……」

「だから! 違います!!!」

うーむ、何故か春奈ちゃんが顔を真っ赤に必死に何かを否定している今なら逃げれそう。怖いんだもん春奈ちゃん。

「あああ! もう美夢さんも秋さんもお説教です!!!そこに正座!」

「いや、僕は巻き込まれた立場というか……」

「正座!!!」

「………はい」

その後美夢ちゃんと二人で足が痺れるほどの時間春奈ちゃんに怒られた。

お詫びとして今度春奈ちゃんと一緒に出掛けることで許してくれるらしい。隣で美夢ちゃんはむくれていたが。



帰ろうかと荷物を持つと美夢ちゃんが袖をちよこんとつまんで引き止められた

「ん? どうかした?」

「秋くん、秋くんドキドキした?」

「超ドキドキした。別の意味でも」

春奈ちゃん怖かった……

「でもあんな事しちやダメだよ、美夢ちゃん」

「大丈夫だよ、秋くんにしかしらないよ、もつと皆に負けなくらいアピールをしないといけないから。他の男の子はどうでもいいもん」

「うん、ありがとう、美夢ちゃん」

「それはずるいです……。次は絶対にしますからね、キス」

僕はそれまでファンに殺されず生きていられるのだろうか。

花巻乙和は子供っぽい可愛い

窓から射し込む太陽の光が少し眩しく賑やかな教室を明るく照らしているお昼すぎ。

しのぶを始めとするクラスの人達は何処かに行ってしまったって手持ち無沙汰さから、ぐてーと身体を投げ出し机に寝そべる。

朝、先生が五時間目に何かあると言っていたような気もするけど、昨日のゲームのやり過ぎで眠たすぎて聞いていない。

「暇だなー」

暇だけど、こののどかな時間のなんと素晴らしきことか。

最近、色々ありすぎて何も無いこの時間がとても久しく感じる。

このまま寝てしまおう。皆いないしと眠気に身を任せ目を閉じようとしていると何処からかドタドタと囂しい足音が聞こえた。

そして、僕の教室の扉がガラリと開けられて直ぐその主はこう叫んだ。

「秋くん、大変だよ!!! 今日予防接種だ!!!」

よぼうせつしゅ……?今とても嫌な単語を聞いたような……

すぐ様顔を上げると、主はどうやら乙和さんだったみたいだ。

「よぼうせつしゅ……?」

「そうだよ! 予防接種!! 注射だよ!!」

「注射!？」

光の速さで席を立ち乙和さんに詰め寄った。

「本当ですか!？」

「あのね、今順番二年生で私、逃げてきたんだよ! 一年生ももう少しで来るはずだよ! この学校男の子秋くんしかいないから女子が最初だからその内クラスの人が呼びに来ちゃうよ!」

注射……針……身体に……刺す……?」

恐怖で思考停止の状態になっていると響子ちゃんがこちらに来た。

「秋、注射そろそろだから保健室に来てって」

そして、悪魔も震え上がるほどの恐ろしい言葉を僕に告げた。

「嫌だ……注射いやだ……」

「私も一緒に行くからさ、ほら秋」

手をこちらに差し出し、人とは思えない誘いをする響子ちゃん。きつと今の響子ちゃんは人間ではないのだろう。多分悪魔に取り憑かれている。

「乙和さん、逃げましょう!!!」

「うん！早くしないとノアも来ちゃうよ〜！」

僕は乙和さんの手を掴んで地獄から逃げるべく走り出した。

「乙和〜!!早く戻って来なさい！」

「乙和〜?注射嫌だからって逃げないで!!」

「乙和さーん」

「秋〜?」

少し走った後に後ろを少し振り向けばノアさん、衣舞紀さん、咲姫ちゃん、響子ちゃんが追いかけて来ていた。もう少し遅かったら捕まっていただろう。

「乙和さん、どこ逃げます?!」

「と、取り敢えず遠くに逃げよう!」

そして、僕と乙和さんはまだ見ぬ誰にも見つからないフロンティアを探しに駆けた。

「ここまで逃げればきつと追いつかれないでしょう」

息を整えながら話しかけた。

気づけばもう学校外まで走っていた。

きつと戻ったら先生に怒られるだろうけど今は注射から逃げる事の方が重要だ。

「そう……だね……」

二人ともはあはあと乱れた息を吐きながら整うのを待つ。

「これからどうします?乙和さん」

「学校には戻れないよね……ノアとか怖そう!」

「確かにそうですね、あと僕の場合はそれに響子ちゃんとかも……、あ

と絵空ちゃんに由香ちゃん、そしてしのぶも…」

「考えてみればいつも秋くんの近くには女の子が沢山いるよね！」

「あれ？何か怒ってます？」

「怒ってない！」

何故かいきなりぷりぷりと頬を膨らませながら言うものだから
てつきり怒っているのかと。

でも別に怒られる理由はないしなあ。

いつも女子といると言うよりは男子が少ない、もしくは居ないよう
な……

だから必然的に友達も女の子になる。

「いつも話しかけよ〜って思ってた教室行くとピキピキの人達と楽しそ
うに話してるし！咲姫ちゃんとも色んな所行ったり、大学生とも知
り合いだっというじゃん！他にも有栖川にもいるし、女の子の知り合
い多すぎ!!浮気はダメだもん……」

いや、そうは言われても……

「ん、というより乙和さんがなんでそんなことを知ってるんですか？
まるでずつと見てるみたいなの……」

「それぞれ、そんなわけないじゃん！ほら、あれだよ！色んな人から聞く
んだよ！今日秋くんとこれをした〜って。衣舞紀とかノアとか咲姫
ちゃんからもよくそういう連絡来るし！羨ましいし……」

「いや、その連絡意味無くないですか？」

一々僕とした事なんて、報告しなくても……

僕と会わないように情報共有でもしてるんじゃないか。

改めて僕はあまり人に好かれられないような人間なんだな……つてし
みじみ思うね。

ふと気づけば未だ乙和さんの手を握っていたままだと気づく。

事務所へ所属している乙和さんだからあまり恋愛を疑われる様な
事は宜しくないだろうと掴んでいた乙和さんの手を離れた。

「あつ……」

乙和さんは名残惜しそうな声を出した。

「さて、これからどうします」

「ん、あ！近くにショッピングセンターあったよね？あそこ行こう！」
「お、いいですね」

ふへへ、とつてもリア充っぽい。

その実はただの先輩との買い物なんですけどね！ああ、彼女が欲しい。乙和さんを初めとする僕の周りの女の子と恋人になってデートする人生を歩みたいよ。

「私と秋くん、二人きりでお出かけ……これってデートかな!？」

「まあ、他人から見たらそう見えるんじゃないんですか？」

「えへへ、デートに行こう！」

顔を真っ赤にしたかと思いきやいつもの元気を取り戻した乙和さん。
ん。

うん、乙和さんには笑顔が一番似合う！

「そ、そんなこと言うから勘違いしちゃう人がいるんだよ！」

「あえ？いや、ただ褒めたただけなんですが」

なんだか今日、乙和さんはよく分からない。

近くの大きなショッピングモールで、僕達は先程手を離れたはずが次は更にパワーアップして腕を組んで歩いている。

何故かと言われれば、乙和さんが

『デートなら腕くらい組むよね!』

と言っていたから。

「あ、クレープ発見！」

「いいですね、デートっぽい。僕買ってきますね、何がいいですか？」

「あのデラックスクレープ!!」

「分かりました」

クレープの前ではしゃいでいる姿はまるで子供のようでも思わず笑ってしまう。

買ったクレープを手に二人で写真を撮ったりした。

「あ、秋くん鼻にクリームついてるよ？」

「え？本当ですか」

「取ってあげるね」

「いえ、全然大丈夫です、本当に大丈夫です。こんなのにすぐに取れますから。ええ、大丈夫です。本当に、はい」

「誰かとなんかあったの〜?」

「前回の美夢ちゃんのパラウマが……………」

う、乙和さんの僕を訝しむ様な視線が痛い!

その後はシヨツピングを楽しんだ。

「秋くん、この服とかどうかな?」

「とつても似合ってますよ」

「あ!あそこにサーフィンボードとかある!」

「乙和さん、得意なんでしたっけ、マリンスポーツ」

「出身が海の方だからね」

「1回見てみたいです。乙和さんの泳ぐ姿」

「…………えっち」

「なんで!」

「乙和さん、この帽子似合うんじゃないんですか?」

「あ、確かに…………つてこれ子供用じゃん!乙和ちゃん、秋くんの先輩なんだよ?」

「いや、乙和さんってあんまり先輩って感じがしなくて」

つい、ポンと頭の上に手を置いて撫でてしまった。なんだろう、妹を見ているような感じ。妹いないからわかんないけどね。

「えへへ…………つて私弟のいるお姉ちゃんなんだけど?!あと秋くんの先輩だし年上だし!」

「クレープとか好きな物を見つけると走って行ってこうやってはしゃいでる人に年上っぽさは…………」

もおくとポコポコと乙和さんが叩いてくるけど全く痛くはない。

その童顔や行動言動も相まって本当に子供っぽい。

それを見てまたクスリと笑ってしまう

「あ、またバカにしたー!」

もうすっかり日も沈み、辺り一面が赤く染め上げている。

あれ?何のためにここに来たんだっけ。

乙和さんと遊ぶ約束でもしたんだっけ。

「楽しかったー!」

「ですね!僕も楽しかったです」

近くの駅には学生達で混んできている。

帰るにはいい頃合いかもしれない。

「そろそろ帰りますか、カバン学校に置いてきてますし」

そう言いながら乙和さんを見ると何処か物憂げな顔をして駅を見ている。

「ねえ、秋くん、このまま二人でどっか遠い所に行っちゃおうか」

「え?」

「ノアと衣舞紀も咲姫ちゃんも知らない遠い場所に二人で、二人きりで何処か家を借りて過ごそうよ」

「それも楽しいかもですね」

ふと、想像をしてみる。乙和さんみたいな人と一緒なんて絶対楽しいだろう。隣で明るく元気に笑ってくれる乙和さんが容易に想像ができた。

「秋くんがいいならさ、今すぐ行こうよ」

「Photon Maidenはどうするんですか?」

「秋くんの方が乙和ちゃんにとっては大事だから」

「乙和さんは皆の乙和さんなんですから僕だけが独り占めなんて出来ませんよ」

何処か今の乙和さんに陰りのあるものを感じた。

でもドキドキとしてこのまま二人で流されたいと思う自分もいて。更にそれを抑える自分もいる。そんな二重思考に囚われて僕は悶々としていた。

「そっか、秋くんらしいな」

乙和さんはぽつりと何かを呟いて、元の太陽よりも眩しい笑顔になった。

「……なーんて、嘘だよー!」

「びつくりしましたよ、揶揄いましたね?」

「後輩を揶揄う事が先輩の権利なのです!今まで乙和ちゃんをバカに

した罰なのです！」

えへん、と大きな胸を張る乙和さん。

そして、と前置きをしてからこう呟いた

「秋くん、こんな感じにわるーい女の子に引っかけかかっっちゃダメなんだからね！私が迎えるまで待つてるんだよ？」

「……う、分かりました……う？」

よく分からないけど分かった！（？）

「帰りましょうか」

分からないものは分からないんだから諦めよう

「あ~~~~~き~~~~??」

「と~~~~わ~~~~??」

ふむ、ここは学校じゃなくて地獄にでも来てしまったのだろうか。

有栖川女学園にも鬼はいたけど、ここにもいたとは。そう言えば注射から逃げたんだった。

目の前には髪の毛を逆立てたノアさん、衣舞紀さんが二人の前に立ちただかる。

咲姫ちゃんは何もせずじっとこちらを見ている。え、怖。

「あれ？響子ちゃんは？」

「練習があるらしいから帰ったわよ。秋をたつたぷり叱つたつと」と言われたわ」

腕を腰に立てながら衣舞紀さんは答えた。

響子ちゃんなら怒るのは軽くなるかなあと思ったんだけどなあ

……

「ほら、秋、保健室行くよ！乙和もね！」

「鬼！ノアと衣舞紀のオニ！」

「ノアさんと衣舞紀さんには人の心が無いんですか!!人間がする所業じゃありませんよ！」

「はいはい、行くよ」

畜生、聞いてもくれやしない！

僕はノアさん、乙和さんが衣舞紀さんに掴まれてズルズルと引きつ

られる。

でも乙和さんと手を繋いでいたのを忘れていた。これ幸いと乙和さんの手を握りしめて踏ん張る。

「はい、エンガチヨ」

それを見たノアさんが僕と乙和さんの繋いでいた手を縁起悪い方法で切った。

乙和さんがお嫁に行けなかったら一体どうしてくれるのだろうか。そしたら僕が……って無理だよねえ

「秋くん」

「どうしたの？咲姫ちゃん」

「私がいる……よ？」

「??？」

保健室へ行けば、先生がキラリと針を光らせながら待っていた。先に注射をするのは乙和さんらしく、椅子に衣舞紀さんに座らせられた。僕も乙和さんも二人にがつちりと掴まれている。

「ね、ねえ……秋くん、怖いから私の手を握って……？」

目に涙を少し貯め上目遣いで乙和さんは手を差し出しながらそう言った。

そんな顔に抗えるはずもなく、僕は乙和さんの手を優しく握る。

「秋くん……」

「乙和さん……」

「はい、そこ見つめ合わない！」

今回で乙和さんと距離がだいぶ縮まった気がする

後日、デートの写真を乙和さんがディグッターに上げたらしく、何故か僕の携帯の通知が一日中煩かった。

笹子・ジェニファー・由香は時々乙女可愛い

僕は、今日八時に起きた。

むくりと布団から立ち上がり、いつの間にか用意されていた朝食を食べた。

最後にお茶を一息で飲み干してゆっくりと時間をかけて息を吐く。そして、僕はこれまでの事を振り返る為に目をつぶった。

今までの僕は絵空ちゃんを初めとする色んな女の子に振り回されてきた。

女の子に振り回される男なんてかつこ悪いじゃないか。

今までは力が無かったから成されるがままだったけれど今日からは僕は変わる。

僕は、今日からトレーニングをするんだ！

筋肉沢山強い、という短絡的な方程式が頭の中に出来上がった僕は、ジムを経営している由香ちゃんに電話をした。

「お邪魔しまーす」

入ると戦う男の汗の匂いが僕の鼻に漂う。

「いらっしゃーい！秋、早かったね！はい、ぎゅー」

カウンターから顔を出したこのジムの経営者の娘、笹子・ジェニファー・由香は僕を視界に捉えるやいなや僕をぎゅっと抱きしめる。

彼女は今、薄手のTシャツにショートパンツというラフな格好で中々僕の理性に強烈な一撃を放ってくる。

辞めると言ってもこれがアメリカの挨拶だ。と辞めてくれない。

ここは日本なのに……

そして、僕は由香ちゃんとの家族皆と一緒に写真を撮るとい謎のプロトコルみたいな事を行った後、その写真は家族写真の様にジムの壁に飾られる。

お父さん曰く「その内うちの家族になるんだから問題ないだろう？」と言う多分僕の知らない世界で使われている知らない言語を使っていたので、僕は理解するのをやめた。

由香ちゃん達と家族……？と幾ら首を捻って考えても分からなかった。

「今日はどこを鍛えるの？」

「んー、全体的に筋肉が付くようにメニューを組んで欲しいかな」

マッチ棒の様な腕に力を込めても力こぶは対して出来ないのが情けない。頑張れ僕の上腕二頭筋。

だからといって鍛える部位が偏るのもいけないしね。

「分かったわー！私の特別メニューにするから!!」

「いや……あの……軽めをお願いします……」

僕のお願いは聞き入れられなかった。

誰かに骨は拾ってもらおう。

「はい、休憩！」

「あああ……」

僕は床に倒れ込んだ。張り切っているのか知らないけれど絶対初心者がやるメニューでは無い。足はもう産まれたての子鹿の様にプルプルしているし、手はもう力が入らない。

スポーツドリンクを一口飲んで、僕は汗をタオルで拭いた。

僕と同じメニューを由香ちゃんもやっていたのだけれど、由香ちゃんは未だ余裕な表情をしている。彼女の筋肉、体力は目に見張るものがある。今も彼女の腹筋は惜しげも無く外気に晒されているけれど、きっと毎日コツコツと彼女が頑張った証なのだろう。

凄いなあ……

僕は今寝そべるだけで床に汗の海が広がっていくよ……

「おつかれ〜♪特性のスムージーだよ……ってきやあ！」

僕に水筒に入ったスムージーを渡そうとしていたら丁度僕たちの汗で湿った床で由香ちゃんが滑った。由香ちゃんだけに。

……うん、対して面白くなかった。忘れて。

間に合うかな……

「いたたた……」

周りに顔を向けるとスムージーはやはり水筒に入れてあったので

無事だった。

何で作られているのか気になるけれど、まあいい。いや、生の鶏肉とか入ってたら僕は死ぬかもしれない。

「ごめん、秋……」

「いや、僕は大丈夫なんだけど……」

僕にも由香ちゃんにも怪我が無いようでとても良かった。うん、いや、それは良かったんだけどこの体勢だよねえ……

由香ちゃんが僕を押し倒している、という風に見えてしまうこの体勢。

動こうとしたら、由香ちゃんにガシツと肩を掴まれた。

「秋……」

なんだろう、由香ちゃんが僕を見る目付きがとても怖いような気がする。

汗やそれに交じって香る香水、女の子の甘い匂い、運動したから赤く染まっている頬、そして何だか色っぽい声。

更に今までは反対に目は肉食動物が餌を見つけたかのように鋭き目。

肉食動物に囚われてしまった草食動物はただ死を待つ事しか出来なくて。

と思っただらどこからか視線を感じた。

二人でそちらを向くと由香ちゃんのご両親が目を煌めかせてこっちを見ていた。

「えつと……ごめん！秋！」

サツと飛び引いた。

「えつと……大丈夫だから」

何となく気まずい。僕はこの後由香ちゃんの両親に何て言われるのだろうか。

『義母さんって気軽に呼んでくれてもいいんだよ、うちの跡取りみたいなものだからね』

とまあ、こんな感じだろうか。由香ちゃんの両親のお母さん、お父さんの発音はどこかねちっこさを感じる。発音は僕、おかしくない

思うんだけど……

「うん、こんな時はハグだよね！」

立ち直ったらしい由香ちゃんがむくりと起きて僕に両手を広げてジリジリと近づいてくる。アメリカンコミュニケーションは僕にはハードルが高い。

一歩近づいてくる度に一歩後ずさる。

すると、ハツと気づいたように由香ちゃんは自分の服をくんと嗅ぎ始めた。

「ごめん、私汗臭かったよね……」

なんだろう、由香ちゃんにしっぱの幻影が見える気がする。そのしっぱは力無く垂れ下がっていても悲しそう。

僕も由香ちゃんの首筋辺りを嗅いでみる。

「あの……ちよつと秋……？」

「いや、臭くないよ、寧ろいい匂い」

「本当に!?それじゃあ私も……」

由香ちゃんも僕の匂いをくんと嗅ぎ始める。傍から見たらとても不思議な光景だろう。

「うん、とつてもいい匂い、私、この匂い好きかも」

「僕の方こそ汗臭いだろうに」

「相性がいい時は相手の匂いを不快に感じないらしいから、私達相性ピッタリなんじゃない?」

「そうかもね」

「結婚しちゃう?」

「僕に由香ちゃんには釣り合わないよ、僕には勿体ないくらいさ。もっと素敵な人がいると思うよ」

「結構本気だったのに……」

肩を落とした様子の由香ちゃん。

どうしたんだろ?

分からないからいつか、明日筋肉痛確定だなあ……と僕は彼女をよそ目に考えていた。

次の日、僕は一日中筋肉痛で動けなかった為学校を休んだら、携帯の連絡アプリの通知がその日鳴る止むことはなかった。